

平成 23 年 12 月 9 日

「介護職員によるたんの吸引等の研修テキスト」
「介護職員によるたんの吸引等の研修テキスト～指導上の留意点～」
正誤表ならびに補足説明 No6

■正誤表

介護職員によるたんの吸引等の研修テキストⅠ

該当ページ	該当箇所	誤	正
P142	(2) 経鼻経管栄養法の場合 9 行目	計量カップ、ストッパーを保護するガーゼ等。	計量カップ、ストッパー <u>(または、栓)</u> を保護するガーゼ等。

介護職員によるたんの吸引等の研修テキストⅡ

該当ページ	該当箇所	誤	正
P40	プロセス 4) [行]留意事項 5 行目 [列]	長時間にならないよう、適切な吸引時間 (10～ <u>20</u> 秒以内)	長時間にならないよう、適切な吸引時間 (10～ <u>15</u> 秒以内)
P54	プロセス 3) [行]留意事項 [列] 7 行目	(追加)	<u>適切な体位に整える。</u> <u>胃ろう・腸ろう栄養チューブが、ねじれたり折れたりしていないか、固定が外れていないかを確認する。</u>
P56	プロセス 7) [行]内容 [列] 5 行目	注入物の逆流を防ぐため、栄養点滴チューブを止めるとともに頭部を	注入物の逆流を防ぐため、 <u>栄養点滴チューブのクレンメ</u> を止めるとともに頭部を
P68	プロセス 3) [行]実施者 [列] 9 行目	(追加)	<u>看護職員</u> <u>介護職員</u>
P68	プロセス 3) [行]留意事項 [列] 9 行目	<u>介護職員のみで行う場合</u> <u>で、経鼻経管栄養チューブ</u> <u>につまりがある場合には、</u> <u>看護職員に連絡</u> する。	<u>適切な体位に整える。</u> 経鼻経管栄養チューブが、 <u>ねじれたり折れたり</u> していないか、 <u>固定が外れていないかを確認</u> する。

介護職員によるたんの吸引等の研修評価票

該当ページ	該当箇所	誤	正
表紙	下から3行目	2. たんの吸引 介護職員評価票	2. たんの吸引 介護職員等評価票
	下から1行目	4. 経管栄養 介護職員評価票	4. 経管栄養 介護職員等評価票
1. たんの吸引指導者評価票(5)(6)(7)(8)	12行目 ケア実施対象者(別紙参照)	ケア実施対象者(別紙参照)	ケア実施対象者
2. たんの吸引介護職員等評価票(5)(6)(7)(8)			
3. 経管栄養指導者評価票(3)(4)			
4. 経管栄養介護職員等評価票(3)(4)			

■補足説明

介護職員によるたんの吸引等の研修テキスト I

該当ページ	該当箇所	内容	補足説明
P101	表 7-4. 吸引実施の手順 清潔[行] 気管カニューレ内の吸引[列]1行目	基本的には滅菌された清潔な手袋を両手につける。 (またはセッションを持つ)	気管カニューレ内部の吸引については基本的には滅菌手袋を使用するが、居宅において滅菌手袋を常備することが困難な場合がある。その場合、施設・事業所の衛生・安全管理に

			関する判断に基づいて統一した方法で行う。
P102	表 7-4.吸引実施の手順の注意点 ※4	粘膜への損傷や、多量の空気を吸引しないために、圧をかけずに挿入する（口鼻腔）。一方、気管カニューレ内は粘膜がなく、分泌物の落とし込み防止のため、圧をかけた状態で挿入（気管カニューレ）するのが原則であるが、利用者の主観もあり、事前に取り決められた方法で行う。	口腔内・鼻腔内吸引については、粘膜への吸いつきの危険があるため、「吸引圧をかけない」として統一している。一方、気管カニューレ内部については、適切な吸引チューブを用いることで空気の吸引量は、わずか数 10ml であること、気管切開カニューレ内部であれば粘膜損傷の危険はないこと、「吸引圧をかけない」ということによる弊害として、吸引時に一気に吸引チューブを開放することによる陰圧が急激にかかり粘膜の損傷を招くということがあります吸引圧をかけたままでも問題ないことが指摘されており*、「圧をかけた状態で挿入する」ことを原則としているが、事前に取り決められた方法で行うことが重要である。
P124	図 8-8. 経管栄養法で使用される栄養剤（流動食）の種類	経管栄養法で使用される栄養剤（流動食）の種類	ここでは、よく使用される栄養剤について記載している。
P125	□経管栄養実施上の留意点 下から 8 行目	栄養剤の注入時は、上半身を 30～45 度起こして、逆流を防止することも重要です。	上半身を起こす角度について、30～45 度と記載しておりますが、利用者の状態により、安定して座位の保持ができる人は、90 度程度起こして行い、寝たき

			りで自力で寝返りのできないような人は、30 度程度起こせばよいなど、医師や看護職員の指導のもとに体位を調節することが重要である。
P145	□ 必要物品の準備・設置（環境整備含む）と留意点 ②5 行目	また、栄養剤の温度が室温より低い場合は、37℃～38℃程度に温めておきます。	栄養剤の温度については、環境や利用者の状態により異なるが、注入時に体温と栄養剤の温度差が大きいと身体に影響を及ぼすことがあるため、原則として体温に近い温度に温めることが重要である。
P152	□ 経管栄養実施後の手順と留意点、利用者の身体変化の確認と医療職への報告 ③ 1 行目	カテーテルチップシリンジに 30ml ～ 50ml の白湯（真水を沸かしただけの湯）をゆっくり注入します。	場所によって水道水が飲料できないこともあり、また、水道水が冷たすぎる場合があるので、原則的には、白湯を使用する。また、原則としては、利用者の状態に合わせて、ゆっくり注入する。

介護職員によるたんの吸引等の研修評価票

該当ページ	該当箇所	内容	補足説明
3. 経管栄養指導者評価票と 4. 経管栄養介護職員等評価票（1） （3）	評価項目 N o 17	連結を外し、逆流を防ぐために栄養点滴チューブを止めるとともに頭部を拳上する	この「頭部を拳上する」とは、さらに拳上することではなく「拳上している状態を保つ」ということを意味している
3. 経管栄養指導者評価票と 4. 経管栄養介護職員等評価票（2） （4）	評価項目 N o 16		